

「新しい生活様式」のその先にあるもの～“不便の益”と“便利の害”を考える～

伊田 勝憲(本学教職研究科教授 臨床教育学・教育心理学)

みなさんは「不便益」という言葉を聞いたことがありますか？ 本学の仲谷総長もメンバーの一人である「不便システム研究所」(<http://fuben-eki.jp>)では、不便の益(benefit of inconvenience)というコンセプトを生かしたデザインの考え方や身近な具体例がわかりやすく紹介されています。

鉄道が好きで「時刻表検定」(すでに制度終了)の1級を取得した私にとって、最も身近な「不便益」は「紙の時刻表」です。まず書店で買わなければならず、全国版は重くて持ち運びも面倒で、目的地までのルートが複数のページにまたがり、調べるのに時間もかかりますから、スマホのアプリに比べてとても不便です。しかし、前後の列車の動きが同時に目に入ります。途中駅で快速に乗り換えずに、そのまま普通列車に乗り続けた場合の所要時間が大して違わないこともわかります。混雑した快速より、着席可能な普通列車を選ぶ判断もしやすいですし、実用以外にも紙上旅行などの楽しみがあります。駅弁や料金計算の情報も豊富な紙の時刻表は、不便だけど(だからこそ)使うといいこと(益)があります。

さて、2020年度の春学期は、新型コロナウイルス感染症対策で、キャンパスが閉鎖されたり、授業がオンラインや動画配信になったりするなど、様々な「不便」と「便利」が交錯しています。リアルタイムで双方向のやりとりが可能なオンライン授業は、自宅からでも配信・受講できますし、動画(録画)配信なら学生は好きな時間帯に閲覧することも可能です。しかし、この便利さは意外に厄介かもしれません。

と言うのも、「不便(の)益」の対義語は「便利(の)害」なのです。学習意欲研究者の一人としても心配なのは、「いつでもどこでも学べる」という便利さが、「今ここでやらなくても大丈夫!」という発想に転じやすいことです。「明日やろう」「土日にしよう」と先に延ばし、翌週になって「忘れていた」という事態もあり得ます。夏休みの宿題を2学期始業式の前夜になってから慌てて片付けようとして泣き喚いていた小中学生時代の

伊田君や、自由な一人暮らしになって「また次の曜日に」とゴミ出しを先送りし、いつの間にか標高170cmのゴミ山脈を部屋の中に作り出した大学生時代の伊田君がその典型です。やる気満々なら、自由や便利さがそのままメリット(益)に直結しますが、そうではない場合は、デメリット(害)に要注意です。

そこで本題ですが、新型コロナ対策として登場した「新しい生活様式」の中身を眺めてみると、不便だと感じる場面がありそうです。不便だからと言って必ずメリットがあるとは限りませんが、「不便益」の考え方を参考に、新しい生活様式がもたらす意外なメリットを追求してみるのも選択肢の1つかもしれません。冒頭で紹介した「不便システム研究所」では、不便から得られる益として「上達できる」「工夫できる」「安心・信頼できる」「発見できる」「対象系を理解できる」「主体性が持てる」などといった視点が挙げられています。例示した「紙の時刻表」は、使いこなす中で上達や発見もあり、行動の判断にも主体性を持てます。「新しい生活様式」も、背景にどのような科学的根拠があるのかを学んだり、その学びに基づいて別の工夫もありうるのではないかと想像したりする中で、主体的に生活することが大切かもしれません。

同時に、急速に活用が進むICTなど、一見便利な道具の「便利害」をいかに回避するかも課題です。解決策として、例えば「いつでもどこでも」という便利を「この教室でこの時間にしか閲覧できません」などと限定し、あえて不便にすることで「不便益」を創造する手もあります。とは言いつつ、発展途上のICTはそもそも不便な面もありますから、回避すべきは「便利害」以前に(最悪の)「不便害」かもしれません。

いずれにしても、新しい生活様式と、これからの教育のあり方を、子どもたちとともに、不便益の視点から捉え直してみませんか？宿題もゴミも溜め込みすぎないように……。